

応答 I

内田和彦「伝道の使信」への応答

津村春英

はじめに

第 13 回日本福音主義神学会全国研究会議の主題は「現代日本における伝道の神学」であり、内田和彦氏（以下、内田と略す）がその「伝道の使信」、伝えるメッセージについて新約聖書を中心に研究発表をされた。筆者は同じ新約聖書学を研究する者として、順を追ってできるだけ批判的に応答したいと思う。なお、筆者の手元に届いた発表者の原稿には注記がなかったことと、引用する聖書は新改訳聖書であることを断わっておく。

1. 序論について

A. 今日の教会における伝道の衰退に関して

まず、内田が指摘するところの昨今の教会の伝道集会などを開く頻度減や日数減は、必ずしも「教会の伝道力の低下、伝道の情熱の後退」だけを意味するのではないと考える。時代は変わり、皆が多忙になっていることや信者の高齢化などいくつかの原因が考えられるからである。従って、その現象を見て単に悲観的になることではなく、むしろ教会の伝道戦略の転換、パラダイムシフトが必要であるときと考えるべきである¹。但し、内田が言うように、「伝道を神

¹ パラダイムシフトについては、まず、D・J・ボッシュ『宣教のパラダイム転換・上』東京ミッション研究所訳、東京ミッション研究所、1999。同名の下巻は2001年出版を挙げておく。原著は、David J. Bosch, *Transforming Mission Paradigm Shifts in Theology of Mission*, Orbis Books, 1991。宣教する共同体とは、自分たちが周囲の

学的に再考することが急務」であることには筆者も痛感している。ただ、表題にあるように「現代日本における」と言うのであれば、現代日本とは何かについてまず論じる必要がある。この点についてはほとんど言及がなされていない。「伝えるメッセージ」を考える前に、一体、「誰に」伝えるのが最初に明確にされなければならない。世界的な経済不況に見舞われてはいるが、少子高齢化、格差社会、教育問題、環境問題など、現代の日本社会はネガティブなキーワードで満ちている。この混沌とした社会の人々が対象である。

B. 福音主義神学の課題に関して

内田は、「人を救う使信とは何かを明らかにする神学は福音主義神学の中心にしなければならない」と言うが、ではまず、「福音主義神学」とは何かを定義することから始めなければならない。H・ミュラーは、「福音主義神学とはその基点においては啓示神学であるとともに、イエス・キリストの業と死と生における十戒の『第一戒』の成就に基づき、異教的自然神学とユダヤ教的律法神学に対立するものである」と言う²。またアリスター・E・マクグラスは、「福音伝道主義」(訳者が神学者ではなくイギリス文学者であり、ここは「福音主義」に相当すると思われる)について、「福音伝道主義は、聖書を非常に強く強調する。...イエスの十字架を特に重視する。...個人の回心の必要性を強調する。...福音伝道主義の教会や個人宣教師は、福音伝道に深く打ち込んでいる。」などと説明している³。他方、日本福音主義神学会の規約第三条(立場)に、「本会は聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場に立つ」と規定している。

聖書の十全靈感(plenary inspiration)、無謬性(infallibility)、無誤性(inerrancy)については、宇田進が福音主義者の聖書観を次のよう要約している⁴。①十全靈感は

状況とは異質な存在であるが、その状況に責任的にかかわっていることを理解している共同体である。それはその状況の中に、魅力的であると同時に挑戦的な方法で存在していると言うことである。

² H・ミュラー「福音主義神学と福音主義教義学の本質と課題」『福音主義神学概説』雨宮 栄一、森本あんり訳、日本基督教団出版局、1987、35-37頁参照

³ アリスター・E・マクグラス『総説キリスト教——はじめての人のためのキリスト教ガイド』本田峰子訳、キリスト新聞社、2008、530頁参照

⁴ 宇田進『現代福音主義神学』、いのちのことば社、2002、232、237頁参照

原典において、②無謬性は英国宗教改革の時代までさかのぼり、③無誤性については19世紀後半から使われ始めたが、無謬性と無誤性は同義的、互換的なもので、「信頼できる、まったく正しい、誤ることがありえない」が両者に共通した意味である。

さらに、「福音主義神学は、聖書の人間性の理解において次の点を認めてきた。第一に、神の啓示が人間の思想と言語を通して人間に伝達されたという事実、『制約』(limitation)を含む。...第二に、イエス・キリストの啓示は目撃証人を含む多様な証人たちをとおしてわれわれに届けられたということから理解される聖書の『証言的性格』にも着目すべきである」と述べている⁵。また、ローザンヌ誓約(1974)第二項「旧・新両訳聖書全体が、神の靈感による、真実で、権威ある唯一の書き記された神のことばであり、それが証言するすべてにおいて誤りがなく、信仰と実践の唯一の無謬の規範である」⁶をも指摘している。

他方、米国の福音主義神学会に関するもので、田中智恵「米国福音主義神学会における編集史批評の可能性と限界をめぐって」『福音主義神学 18』(1987)も参考になると思われる⁷。なお、最近では、聖書の批評学は、従来の通時的な歴史的批評的研究から、共時的な文芸学的・物語論的研究、読者反応批評的研究、テキスト言語学的研究、スピーチアクト理論研究、文学社会学的研究、修辭学的研究、構造主義的研究などに若い研究者の関心が移ってきている。

さて、問題を福音主義の課題に戻すと、内田は、「伝道が困難と言われる今日の日

⁵ 同書、238頁参照

⁶ 同書、240頁参照

⁷ 田中智恵「米国福音主義神学会における編集史批評の可能性と限界をめぐって」『福音主義神学 18』(1987)。編集史を全く用いない伝統的な歴史的・文法的方法を固守しようとするR・トーマス Thomas は、福音書の編集的理解は、福音書記者が第一に選択、第二に順序の変更、第三に用語・文体・共同体の神学的関心による変更、第四に創作であり、福音派の立場は第三まで可能と考えている(121頁)。これに対して、聖書の無誤性と無謬性を守りつつ、編集史を用いて行こうというD・A・カーソン Carson の立場を紹介している(137頁)。田中は、「記者の編集を認めつつ、聖書の歴史性を守ることが、現在の米国福音主義神学会の許容する編集史批評の実際である。...福音書記者の神学に注目するという見方が市民権を得つつあるように思われる。」と結んでいる(138頁)。

本の状況において、福音とは何か、伝道の使信とは何かを再考することは、私たちのアイデンティティに関わる火急の課題である。この課題に福音主義神学が向かうとき、それはまず、聖書神学的な取り組みでなければならない。」(下線筆者)と言うのは聖書学者の当然の弁である。

次に本論では、内田は冒頭で R・C・スプロール『何からの救いなのか』—神の恵みの奥義(魚本つる子訳、いのちのことば社、2008. 原著は *Saved from what?* Crossway, 2002)を引用する。スプロールは長老派の神学者であり、先に、『非キリスト教的思想入門』(田代泰成訳、いのちのことば社、2003. 原著は *Lifeyviews: Make a Christian Impact on Culture and Society*, Revell, 1990.)が邦訳されている。内田はこのスプロールの『何からの救いなのか』にならって、「何からの救いなのか」、「何による救いなのか」、「何のための救いなのか」の順序が重要であることを指摘している。では早速、本論から入って行こう。

II. 本論について

A. 何からの救いなのか

内田は、まず「何からの救いなのか」から入る。その項目だけをまとめてみると以下ようになる。

- 1) 神の聖なる怒りからの救い..... なだめ(の供え物)、和解
- 2) 罪(責)からの救い..... 贖い、義認
- 3) 罪(の力)からの救い..... 贖いによる、罪の支配と力からの救い
- 4) サタンの支配からの救い..... サタンの支配からの自由

筆者の見るところ、内田のこの分類は宇田進『現代福音主義神学』に紹介されてある J・マーレーの『キリスト教救済の論理』のものと同様である。マーレーは、「いけにえ」(ヘブル9章など)、「なだめの供え物」、「贖い」(罪の力の支配、サタンの支配と権威)、「和解」に分類し、後に「義認」にも言及している⁸。

前掲のスプロール本では、「罪」を、負債としての罪、敵意としての罪、犯罪

⁸ 宇田進『現代福音主義神学』、355-358 頁参照

としての罪のように三つに分類している⁹。他方、大貫隆が「イエスの死を『救済死』と見ることは、そのままそれを『贖罪死』と見ることは同じでない。...新約聖書に見られる贖罪信仰は、『罪』の内容的な定義に即して見るとき、ユダヤ教伝来のモーセ律法を規準あるいは前提とするタイプと、モーセ律法とは原理的にはもはや無関係なタイプの二つに大別される」¹⁰と指摘していることも看過してはならない。ヨハネの福音書では、「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないからです。」(16:9; 他に9:41見えると言う罪; 15:22, 24 私と父を憎む)とあり、イエスと神を信じないこと、それ自体が罪であると言っている。なお、内田の「神の聖性についての意識が希薄になってしまった現代の教会が回復すべきメッセージが、ここにあると言えよう」という言葉は的を射た発言である。

B. 何を伝えているのか

次に、伝えるメッセージの内容について、それは勿論、「福音」である。内田は新約聖書の配列順に従って説明をしているが、以下に順を追って批評する。

1. まず、共観福音書における「福音」は「御国の福音」であったと言う。マルコ福音書における「福音」はイエスの公生涯の全体を意味すると述べているのは、妥当である¹¹。キリストの受難に全体の約 2/5、神の子イエスへの言

⁹ R・C・スプロール『何からの救いなのか』—神の恵みの奥義、魚本つる子訳、いのちのことば社、2008、60, 64, 70 頁参照

¹⁰ 大貫隆『イエスの時』、岩波書店、2005、129-131 頁参照

¹¹ 川島はマルコ福音書が「イエスの十字架と復活を主要内容とするパウロ的福音理解に対して、イエスの生をも福音として提示する」(下線筆者)と述べ、加山は「マルコは、ここで、まさしくひとりの人間として苦悶し、十字架の苦しみを生身に受けたイエスを示すことによって、迫害や苦難のなかを生きている者に共苦してくださいるかたであることを教えようとしているのです。」(下線筆者)と述べている。川島貞雄『マルコ福音書』、日本基督教団出版局、1996、60-61 頁参照。加山久夫『聖書を読む マルコ福音書』、筑摩書房、1989、134 頁参照。なお、文体については William L. Lane, *The Gospel of Mark, The International Commentary on the New Testament*, Grand Rapids: W. B. Eerdmans. Pub. Co., 1974. マルコにおけるペテロの告白 8:29 は最もシンプルで、最も直接的で、感動的な文体であるに賛同。pp.290-291 を参照

及(1:1,11; 10:45; 12:6; 14:61)も加えたい。マタイ福音書では、「インマヌエル」の約束の実現が「福音」だと言う。また、主イエスの父である神への全幅の信頼を表す「御心になるように」(6:10; 26:42)も加えたい。さらに、「教会」(16:18, 18:17)と言う観点も見落してはならない。福音を伝える「弟子として生きること」(28:19)も妥当である。ルカ福音書には「救い主、救い」の用語が見られ、被疎外者への関心(貧しい人々(6:20; 14:21)、婦人への言及(43回))がある。内田の言う「喜びの音信」は、罪の悔い改めと罪の赦しからくる讚美とも言える¹²。

2. 次に、ヨハネ福音書には「イエスは誰であるか」というキリスト論が書かれてあり、「永遠の命」、「御父に至る真の道」、「イエスの神性」にふれているが、「神の愛」、「キリストの愛」(15章)についてももっと高調されなければならないだろう。また、「世の罪を取り除く神の子羊」(1:29; 19:14)については、この一言がヨハネ福音書全体に支配的であるとまでは言えないのではないか。それより、「受肉」「キリストの派遣」「臨在する復活者キリスト」が特徴的であると考える。

3. 使徒の働きにおける「福音」では、救いのメッセージの伝達に関する重要な概念は「証人、証し」だと言う。そして、それは「イエスこそ主」であると言う証しであるとの説明は妥当である。「使徒の働き」における使徒たちの論敵は多くの場合、異邦人と言うよりは、むしろ会堂に集まるユダヤ人であり、「追っかけのユダヤ人」であった。但し、ユダヤ人と異邦人の併記(使徒14:5; 26:23)、ユダヤ人とギリシア人の併記(使徒18:4; 19:10, 17; 20:21; 21:28)も見られる。彼らへの中心的メッセージは、「イエスこそキリスト」(使徒17:3; 18:5, 28)であった¹³。

4. パウロ書簡における「福音」では、パウロが伝えた「福音」のメッセージは何であったかと問いかける。そして、ガラテヤ、ローマ、コリント一などが

¹² 津村春英「ルカ福音書のコヒアレンスとその人物描写Ⅰ」『神学と神文』第36集、1996。なお、εὐαγγελίζομαι εὐαγγέλιον κηρύσσωのいずれもヨハネ福音書とヨハネの手紙には出ていない。

¹³ 津村春英「ルカ福音書のコヒアレンス考Ⅱ」『神学と人文』第38集、1998、30、33頁参照

ら、「キリスト・イエスを信じる信仰」(ガラテヤ2:16)、「福音の要約」(ローマ1:2-4)、「神の義」、「恵み」、「救い」、「選びの民」、「憐み」や、コリント一15:3-5のキリストの死、葬り、復活、顕現において、「福音」が提示されていることを指摘し、神の裁きがローマ2:16に提示されていると丁寧に説いている。

5. しかし、新約聖書には「福音」を告げる箇所がまだ随所にある。たとえばヘブル書の大祭司キリスト論であり、ヨハネの手紙一の「神は愛」は聖書中の聖書とも言われるし、牧会書簡の中にも「福音」は語られている¹⁴。さらに広く、新約聖書からだけでなく旧約聖書から関連づけて語ることができよう。それは初期教会の伝道方法でもある。つまり、全聖書から、福音について語ることができる。それはまた、多くの人々が聖書の様々な箇所のみことばを通して救われているという事実が証明している。

C. 救いのメッセージがどのように、どこまで伝えているか

1. どのように提示されているか

救いのメッセージを伝える時には、勿論、伝え方、アプローチの仕方は、伝える相手、対象によって変えることも必要となる。それは共観福音書の記述の違いについても教えられることでもある。初期のキリスト者の証しは宗教的、伝統的、政治的、社会的な反対勢力との対立の中でなされたことを覚えなければならぬ¹⁵。

¹⁴ 福音 εὐαγγέλιον は、マタイ4:23; 9:35; 24:14; 26:13; マルコ1:1, 14f; 8:35; 10:29; 13:10; 14:9; 16:15; 使徒15:7; 20:24; ローマ1:1, 9, 16; 2:16; 10:16; 11:28; 15:16, 19; 16:25; コリント一4:15; 9:12, 14, 18, 23; 15:1; コリント二2:12; 4:3f; 8:18; 9:13; 10:14; 11:4, 7; ガラテヤ1:6f, 11; 2:2, 5, 7, 14; エペソ1:13; 3:6; 6:15, 19; ペリピ1:5, 7, 12, 16, 27; 2:22; 4:3, 15; コロサイ1:5, 23; テサロニケ一1:5; 2:2, 4, 8f; 3:2; テサロニケ二1:8; 2:14; テモテ一1:11; テモテ二1:8, 10; 2:8; ピレモン13; ペテロー4:17; 黙示録14:6に出てくる。

¹⁵ W・R・シェンク Schenk は、初期のキリスト者の証しは宗教的、伝統的、政治的、社会的な反対勢力との対立の中でなされたと述べている。Wilbert R. Schenk, *By Faith They Went Out*, Mennonite Missions 1850-1999, Institute of Mennonite Studies, 2000, p.126. 参照